

徹底的に純粋な観念論の限界

——フィヒテが知の外部に絶対者を想定する理由——

入江幸男（大阪大学）

ベルリン期のフィヒテは、知を存在の現象と考える。このように知の外部に存在を想定することは、一見すると、物自体の存在を否定する徹底した純粋なフィヒテの観念論に反するように思われる。ここでは、フィヒテが知の外部に存在を想定する理由について、一つの説明を提案したい（フィヒテ解釈としての文献的な証拠集めはまだ不十分である）。

1 フィヒテの基本的立場

- ①二元論は物からその表象が生まれることを説明できない
- ②唯物論か観念論か懐疑論しか残されていない。
- ③唯物論は、整合的な理論であるが、自由を否定する。（フィヒテはこれを認めたくない）
- ④懐疑論は、自己矛盾している。
- ⑤観念論しか無い。¹

フィヒテの主張した観念論は、次のような徹底的な純粋な観念論である。

- (1) 何かが存在するとは、それが知られることである。
- (1) 知が存在するというのもまた、知が知られるということである。
- (2) 知と知の関係もまた成立するためには、知られている必要がある。
←概念は他の概念との区別において成立し、その区別は知られている必要がある。
- (3) 唯一の知のみが存在する。((1) (2) (3) より)

2、フィヒテによる物自体の否定の証明

(1) 『知識学の方法』(1874)では、フィヒテは物自体を完全には否定しておらず、それを必然性の感情の背後にあるものと考えている。（この第二版(1878)では、この部分を削除している。）

(2) フィヒテは、『全知識学の基礎』(1874)でも、これと同様に、非我＝物自体＝絶対者（ここではこの三者を区別していないようにみえる）(の实在性)を完全には否定していない。非我の实在性をみとめることと認めないことの間を、構想力は揺れ動く。²

¹ 唯物論、観念論、二元論、批判的観念論、の比較については、『知識学 nova methodo』(GAIV/2, 55, 日本語全集 7 巻、62)

² 「物自体は自我に対するあるものである。従って、自我の中にある。しかし自我の中にあるべきではない。したがって矛盾するものであるが、しかし、それにも拘わらず必然的理念の対象として、われわれのあらゆる哲学的思索の根底におかれなければならないものであり、また古来、有限的精神のあらゆる哲学的思索とあらゆる行為との根底に存在していたのであって、ただそれとその中に潜む矛盾とをひとは明瞭に意識しなかつただけである。」(『全知識学の

「有限的精神は、必然的に絶対的にある絶対者を自己のそとに定立しなければならない(物自体)、しかし、それにも拘わらず、他面においては、この絶対者は彼に対してのみ現存する(必然的な可想体である)ということ承認しなくてはならない。このことはまさしく循環であって、有限的精神はこれを無限に拡大することができるが、しかしそこから決して脱出することはできないのである。ここに示したこの循環を全く顧慮しない体系は独断的観念論である。なぜなら、われわれを限局して有限的存在者たらしめるものは本来かの循環のみだからである。この循環から脱出していると妄想する体系は超越的實在論的独断論である。

知識学は、二つの体系の間において断固として中点を保持する。それは批判的観念論であって、これを「实在・観念論」(Real-Idealismus)ないし「観念・实在論」(Ideal-Realismus)とも呼ぶことができる。」(『全知識学の基礎』 SW.I, 281)

(3)『知識学 nova methodo』では、上記の循環が、認識と行為の循環として再定式され、この循環が「促し」理論によって解決された(この「促し」理論は、『自然法論』『道徳論の体系』でも論じられるものである)。これによって非我の實在性を完全に否定することが可能になった。³

「私の外には何もない、いかなる物自体も無い。私自身だけが私の意識の客観となりうる。これが超越論的観念論の主要格律であり、その最深の精神である」(GAIV/2, 163, 日本語全集 7 巻、215)

(4)『知識学の第二序論』でも、物自体を明確に否定している(Vgl. SW I,483, 日本語全集 7 巻、215)。

こうして有限的理性が抱える定立と反立の循環を解決することによって、フィヒテは、有限な理性的存在者の立場を超えて、一つの理性、一つの知から出発することができるようになる。それが『知識学の叙述』(1801)になる。

3、フィヒテが絶対者を導入する理由

(1) 徹底的な純粋な観念論の限界

知識学の出発点は、今や自我や意識ではなくて(なぜなら、これらは個人の自我や意識をさすことが多いからである)、一つの知になる。知は、不変的で普遍的で必然的な真理を表す。

基礎』SWI,283)

「この理念の二つの反立的な限定の中間に動揺すべきであろう。ところで、これが創造的構想力の仕事である。」(『全知識学の基礎』SWI, 284)

³ 「非我は自我の別の観方に過ぎない。活動する自我が自我を与える、静止する自我、つまり単なる客観と考えられた自我が非我を与える。」(GAIV/2, 40, 日本語全 7 巻、39)

「観念論では、非我は偶有性にすぎない。観念論は本来いかなる非我ももたず、その非我は自我を見る特殊な仕方にすぎない。」(GAIV/2, 40, 日本語全集 7 巻、39)

ただし、それは必然的な法則性によって可能になる。そして、知は、この法則を自ら構成することはできない。もしそうならそれは自由なものになり、知は必然性の感情が伴わない表象になってしま^うからである。知は知られることによって存在する。知の存在は自由である。しかし、そのこと自体は必然的である。この必然性は、知によって自由に措定されるのではない。

知が構成するのではないとしても、知の法則は、知られることは可能である。そして知られることによって存在する。知は知られることによって存在するので、法則が知の法則であり、知の構成要素である限り、法則もまた知られることによって存在すると考えられる。

法則は知られるが、法則はこれを知る知によって自由に措定されるのではない。なぜなら、法則を知る知もまたこの法則に従うことによって可能になるから、法則を知る知が法則を自由に措定することはできないからである。法則は、知が自由に措定できるものではなく、それは必然的なものである。

では、この法則はどこから来るのだろうか。この法則の根拠は何だろうか。それを、フィヒテは絶対者として導入したのではないだろうか。フィヒテは、限りなく純粋な観念論を考えたが、知の法則が知に解消しきれないことに気づき、その根拠を想定せざるを得なくなったのである。その根拠については、あるとしか言えないので、1810年の知識学以後にはそれは存在と呼ばれることになった。

(2) 『知識学の叙述』(1801)

ここで、フィヒテは、絶対者についての次のように語る。「知識学は絶対者から出発することはできず、むしろ絶対知から出発しなければならない。」(GAI/16, 144 全集訳 12 卷、251)

「絶対者はまさにそれが提示されている結合の中においてのみ知の「形式」として我々の意識に入ってくるが、しかし決してそれ自体において入ってくることはないであろう」(GAI/16, 144 全集訳 12 卷、251)

「知はまさに絶対的であるということに他ならないというその内容に従って、必然的として現れるのである。一般に知が存在するという命題は偶然的である。しかし、もし知が存在するならば、それはかくかくであるということ、すなわち絶対的に自己の上に安住する知——根源のまさにそれゆえに非存在の対自態であり、一挙にして直観と思惟であるという命題は端的に必然的である。」(GAI/6, 199f、日本語全集 12 卷、332) (下線は引用者)

「絶対者(実体)についての私の知は自由な反省によって、ところがこの反省は拘束されているから、反省の拘束性=偶有性によって限定されている。[···]逆に存在の立場に立てば、偶有性の限定性は実体から説明される、かくして自体的に永遠にかつ絶対に分離されたものが、一方から他方へ進行する必然性によって合一されている。」(GAI/6, 204、日本語全集 12 卷、337)

(3) WL1804

「知識学講義 1804 冬学期」では、フィヒテは、「知識学は知の組織 (Wissenschaft, Wißthum, Wißheit?wichßheit) の教説」(GAI/6, 70, 日本語全集 13 卷 16) と定義し、さらに「知は、自己に対する絶対者の表現である」(GAI/6, 76, 日本語全集 13 卷 22) と定義している。「知識学講義 1804 年第二回講義」では、「哲学の課題は、絶対者の提示 (Darstellung) としても表現できます。」(GAI/7, 10 日本語全集 13 卷 246) と述べている。「知識学講義 1804 第三回講義」でも、「哲学の課題は、絶対者を提示すること (aufzustellen)」(GAI/6, 304, 日本語全集 13 卷 533) だと述べている。つまり、1804年の知識学では、「知識学の叙述」(1801)とは異なり、知識学は絶対者から始まってい

る。

「知は、自己に対する絶対者の表現なのですから、知のうちにまた知に対して、まさしく絶対者の自己表現があることとなります。従って、自由で自立的な自我、それゆえ自由なものの自己意識としての絶対的な自己意識があることとなります。ここで（a）知はすでに意識と存在に分裂します。[…]（c）ここですでに、意識にとって、把握できないものが把握されており、まさしく意識にとって把握不可能なものとして把握されております。なぜなら、**自立性、行為はなにか或る根拠から必然的に規定されたものであると考えるならば——、絶対的な行為とともに意識は初めて始まるのですから、意識のうちにはこの根拠はまったく現れ得ないこととなります。（意識にとっては接近不可能なのです）**しかし、知識学はこの規定性の根拠を一方では一般的に、意識そのものの内的形式として、他方では、その内容に関して絶対者の自己表出として捉えるのです」（「知識学講義 1804年冬学期」GAII/6, 76, 日本語全集 13巻 24）

了